

[教育推進・学生支援部（以下、教学部）の見解の確認]

京大新聞には「大学当局との交渉について11月祭事務局は『当局は断固として対面開催に反対する姿勢である』と説明した。」という記述があるが、大学として全学的に対面開催に反対しているのではない。施設利用に関しても、対面開催のための施設利用を許可するのが難しいという旨を、担当者（教学部および国際高等教育院）間で協議している、というのみである。

[教育推進・学生支援部との話し合いの記録]

（１）なぜ教学部は対面開催を認められないのか

前提として、大学は感染拡大を防ぐ責任を負っている。現在の社会の感染状況を考慮すると、対面開催によって感染者が出ることが十分に予測できるため、対面開催を認めれば大学が負っている責任を全うできないと判断した。また、11月祭は授業期間中に開催される予定であり、11月祭の開催によって対面授業に影響が及ぶ可能性があり、大学としてこれは避けたい。対面開催によるリスクが十分に小さいという意見を持つ者がいることは理解できるし、政府内でもこれからそのような内容について議論するということになっていると思う。しかし、現時点で教学部はそうは思っていない。

社会の感染状況をふまえ、11月祭の価値と感染拡大を防止する責任を天秤にかけた結果、オンラインでの11月祭開催を提案することが適当であると判断した。前提として、どれだけの対策を講じても、11月祭を対面開催した場合の感染者発生の可能性は0にできない、ということについて、保健診療所の先生に確認できている。ただし、感染症研究者ほど高い水準で科学的なリスクを検討することは教学部にはできないから、教学部が抽象的な主張をしていることは理解しているし、それは仕方がない。

現状では、対面開催時に生じるリスクに対応するための制度や設備がそろっていない。例えば、感染者が発生した場合に、当該感染者が出席していた授業を対面で実施できなくなる恐れがある。また、感染が拡大した際の受け皿となる医療体制も十分に整えられているとはいえない。

オンライン開催が適当であると判断したのは現時点での状況をふまえたものであり、今後の展開次第では許容できるリスクの大きさは変動する可能性がある。例えば、ワクチン接種が進み、経済活動を動かすために少数の人数が感染するリスクも許容していくことができると検証・判断されたのであれば、より大きなリスクを許容する可能性がある。しかしながら、まだその段階には至っていないと考えている。

（２）大学の姿勢は世論とは切り離されるべき

社会からの批判や世論に怯えているわけではない。「課外活動等の実施における感染拡大予防マニュアル」にも書いてある通り、大学は感染拡大を防止するという社会的な責任を負っており、その責任を果たそうとしている。対面で11月祭を開催した場合には、その責任を果たせなくなる可能性が高いと判断した。大学が責任を果たさなかった結果として、社会から批判されることもあるということである。

(3) 対面開催でなくなった場合、サークル文化の存続に関わる。課外活動自体は認めているのにNFの対面開催を認めないのは何故か

サークル文化の存続も大事な問題であるが、それよりもNFを対面開催することによる感染拡大のリスクの方が重いと判断した。現在認めている程度の課外活動であれば、感染が広まるリスクが許容できる範囲内であると考えている。11月祭はオンラインでも実施可能であるから、対面開催を避けることで感染リスクの低下に協力してほしい。